

九
卷
之
一
上



^ 13
2906
9



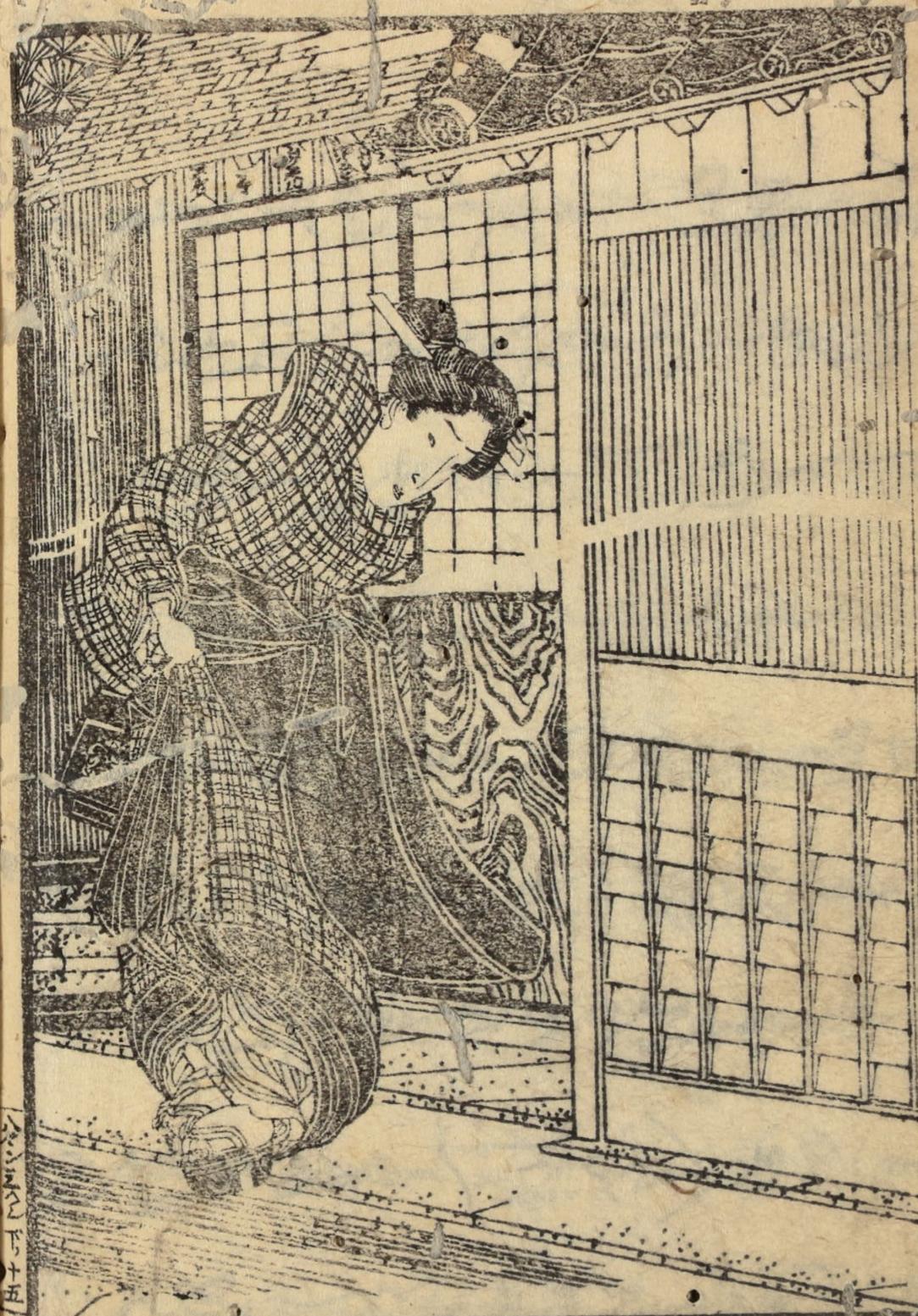
あつておれしうまうまうまうま
おれしうまうまうまうま
あつておれしうまうまうま
あつておれしうまうまうま
あつておれしうまうまうま
あつておれしうまうまうま
あつておれしうまうまうま
あつておれしうまうまうま

てやそらで実があのうり程のり「まが」
おれり金もあつたのう大造かまうま
梅吉さん城わりのうりさ「まが」
不才のうりさ「まが」
さんの在る者「まが」
終く意味の「まが」
心も後方で「まが」
ぢやア「まが」

と云ふるが柳さんの便り紙樂しくも侍てお出なれ
今いづれもあらと名川もあつて其らと六一あつた
しと居る中小もモッ子も其のまゝらまらうと私まア
冥土と申す所の住みつけはあつてあつてどうぞ
けふはそとをみてあつてヨお預ひどうぞ
どうもそのお取とらふのうかあつてよくそ私を託にあり
てあつたヨドマア赤子さんせのち下お抱せ下抱と云ふ
はと後私とと癒と居るヨト焼と云ふ小葉と云ふ
あつた

と云ふと涙成落しさよと云ふあつたまがと
口へ抱きあつて一とくかじらうと云ふ
さよよとく抱き居るとトの中にもわ
一団の陰をとりし陰と云ふと云ふ
たといのまきすがふ利登の秀八の女のゆゑおをりし
と
人が一団お入つてく
あつた





三十五

梅吉の母が 藤原のついでに 藤原のついでに 藤原のついでに
うらやみ 和が河へ 飛があらくに 三律法

此のきき 秀八の病氣の 全く治りて 病氣をよめ 障
子 我ぬぐ 向ふの 登根と 了る 表根鳥 吉相と
昔え カラキ 昔より ぬえたる 物と 縁と

昔え 小侍

春曉八幡佳年之編卷之三終



